

## 18 空所なし関係節

英語において、例文 (1)、例文 (2) のように、wh 句に対応する空所を関係節内に持たない関係節が観察される。

- (1) When I went over there, they were clowning around, which I didn't really care—until I found out they had lost my file. (Kuha 1994: 1)

- (2) And she decided to move out which I think she's crazy. (Loock 2007: 75)

この構文の、特に同格の which は接続詞とも見做され、広く使用され (Kuha 1994)、特定の談話的機能をもつ (Loock 2007) ことが指摘されてきた。

一方、Collins and Radford (2015) は、先行詞により which が who に変わることに (3) 参照) などから、wh 句を関係代名詞と見做し、wh 句は関係節内の空の前置詞の目的語の位置から関係節の左端へ移動するとする。

- (3) They're complaining to the referee about Cristiano Ronaldo, who possibly it was a foul on Gonzalez. (Collins and Radford 2015: 195)

但し、wh 移動が空の前置詞を残留するならば、(4) のような例は移動の制約違反となるので (\*[which Torres could've had a goal without]), wh 移動は空の前置詞の**随伴 (pied-piping)**を行うとする。

- (4) Manchester United have got a good goalkeeper, [which Torres could've had a goal] (ibid.: 203)

前置詞の随伴移動の起因は、口語英語の関係代名詞 which/who が格を持たない変種を発達させたことに帰される。格を持たない要素は格位置に生じてはならず、(1) の関係節の派生において which は前置詞 about の補部の位置から指定部の位置へ移動しとどまる。その結果、wh 移動は PP の移動となり (5) の構造が派生される。

- (5) [CP [PP which [P about] <which>] [C that] I didn't really care <PP>...]

(5) には**位相 (phase)**の主要部と指定部の両方が PF において音形を持った (overt) **スペルアウト (spell-out)**を受けてはならないという制約が適用するとされ、CP 位相の主要部である補文化辞 that が削除され、PP 位相の主要部である前置詞 about が削除を受けると which を含む (1) が派生される (< >内は音声を持たない要素)。(5) への上記の制約の適用が随伴移動された PP の前置詞の削除と wh 句の削除により満たされると補文化辞 that により導かれる空所なし関係節が派生される。(5) において補文化辞 that が削除され、随伴移動された PP の前置詞が削除された後に孤立した wh 句が削除されると関係詞、補文化辞を伴わない空所なし関係節と

なる。

前置詞の削除は、先行詞の存在を要しないGhostingと称する削除規則（Collins and Postal 2012）の適用によるとされる。関係詞whichやwhoは広範な前置詞の目的語として生じ得るので、語用論的推論により聞き手にとって復元可能である限りの前置詞が削除される。

Radford (2019) はCollins and Radford (2015) の分析の問題点として、PP内での短すぎる移動、Ghostingのような強力な規則への依存などに加えて、移動の制約への違反を指摘する。前置詞を随伴しても、(6)における前置詞ofの目的語の位置からの（空の）wh句の移動は主語句内（および等位構造）からの移動であり違反である。(7)における前置詞inの目的語の位置からのwhichのwh移動はwh句whatを越えており移動の違反である。

(6) Prime ministers have to make decisions [that some are public, some are not]

(Radford 2019: 217)

(7) We were mystified by the incident, [which none of us saw what happened]

(ibid.: 230)

Radford (2019) は、この構文のwh句は移動をしない関係詞であるという新たな提案をする。(6)の例の関係節は、“such that some are public, some are not”に書き換えられるが、この場合、関係節であるRELPの指定部の位置には直接、関係節化要素SUCHが基底生成され、SUCHと残りの関係節との関係は語用論的な推論により決定される。同様に(7)では関係代名詞whichがRELPの指定部に基底生成され、関係詞と関係代名詞節との関係が語用論的推論により決定され、whichはaboutnessの解釈（“about which I would comment that ...”）を受ける。いずれの場合にもwh句は移動しないので、移動の制約への違反は生じないとされる。

(小林 桂一郎)